２０２４／１２／０８　　礼拝メッセージ　　近藤　崇志　牧師

主　　題：新しく生まれなければならない
聖書箇所：ヨハネの福音書　３章１－８節

●ジョージ・ホウィトフィールド

今からさかのぼること１７１４年に、ジョージ・ホウィトフィールドという人物がイギリスのグロスターという町に生まれました。後に牧師にもなった彼はイギリスやアメリカを中心に活躍し、その生涯においてなんと１万８千回も説教したと言われています。神様とみことばを心から愛していた彼は確かに大いに用いられたすばらしい信仰者でした。しかしそんなホウィトフィールドも最初から特別な人物だったのではありません。２歳で父親を亡くした彼は幼少期に貧しさを味わい、十代になった頃には友人たちと一緒に教会をバカにすることもありました。また教会に通うようになってからも彼は神様に受け入れられる者になりたいとさまざまなことを自分自身に課すようになるのです。たとえば彼は週に２回３６時間断食をして、餓死寸前まで自分を追い込むことがありました。また別の時にはイエス様が荒野で試みを受けておられたということを思い出して、自分も外に出て凍える寒さの中で何時間も祈ることがありました。その結果彼の健康状態は悪化して、片方の手が壊死することもあったのです。彼はどうにかして神様に受け入れられたいと自分を追い込み続けていました。

しかし、残念ながら彼の心はその都度惨めな思いでいっぱいになり、深い悲しみを覚えるようになっていくのです。彼は苦しみの中にいました。けれども、そんなある時彼の友人のひとりが一冊の本を彼に手渡したのです。彼はその本の中の一つの大切な真理に目を留めます。その真理は新しく生まれ変わらなければならないというものでした。彼はその真理に心が刺され大きく変えられることになりました。このようにして彼はイエス様を心から信じ救われていくのです。新しくされることの喜びと大切さを知ったホウィトフィールドは、後にメッセージを語る機会があれば新しくされることに頻繁に触れ続けました。彼がずっとそのことを語るので、不思議に思ったひとりの友人はこのように尋ねたのです。「なぜあなたはそんなにも頻繁に生まれ変わらなければならないと語るのですか」と。それに対して彼はこのように答えていました。「それはあなたがたが生まれ変わらなければならないからです。」と。

<u>○神の国に入るためには</u>

きょう、みことばから考えていきたいのはこの点についてです。これから内容に入っていきますが、その前によく考えてみてください。あなたは新しく生まれた者でしょうか？新しく生まれた者として今生きているでしょうか？そもそも新しく生まれるということがどういうことか知っているでしょうか？私たちはこれまでヨハネの福音書を通して、カナの婚礼や宮きよめなどイエス様のなされてきたすばらしいみわざを学んできました。どれをとっても私たちがいつも目を留めていなければならないすばらしい真理がそこには記されていたのです。

しかし、今回、私たちが見ていくイエス様とニコデモとの会話の中には、特に神の国に入るための条件や私たちの救いに関する大切な教えがなされています。これは、福音の中の最も基本的なところです。もし私たちがこれから見ていくことを理解もせず、信じていないのであれば私たちの永遠に大きな影響を与えることになります。すべての人にとって、これから見ていくところには大切な内容が記されていました。ですからぜひ自分自身のこととして一緒に考えてみましょう。新しくされることを大きく分けて、新生の必要性と新生の内容の二つからみことばを考えてみたいと思います。そして、神様にあって新しくされることがどんなにすばらしいことなのかをひとりひとりがいま一度考えて、主に感謝する機会となることを心から祈っています。

ではまずいつものとおりにみことばをお読みしたいと思います。特に、きょう私たちはヨハネの福音書３：１－８のところを中心に学んでいきたいと思いますけれども、前回までの流れを少し思い返すためにも２：２３―３：８まで一度お読みします。

ヨハネ２：２３－３：８

「:23 イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。:24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、 :25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。3:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。」:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。:8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」」

１．新生の必要性　１－３節

ではさっそく神の国に入るのに求められる新生の必要性から考えてみましょう。ある日の夜に起きた出来事がこのように描かれていました。もう一度、１－２節を見ていただくとこのように始まっていました。「**:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」**」と。ニコデモと呼ばれる人がここに登場していました。このニコデモも町の多くの人たちと同様にイエス様のなされたさまざまなしるしや奇跡を何度も目にしていたのでしょう。自分の耳に次々に届く今まで聞いたこともないみわざに驚きや不思議さを抱いていたのでしょう。そのようなしるしを行うことができる存在は、いったい何者なのかと心に関心や興味を持っていました。

だからこそ、ある日の夜、彼はイエス様に直接質問しようとして訪ねてきたのです。興味深いことに、なぜ彼が夜やって来たのかということに関して、実はいろいろな議論や説明が人々の間でなされています。たとえばある人たちは、日中常に群衆に取り囲まれていたイエス様と個人的に時間を取れたのが夜だけだったのではないかと考えています。また、ある人たちは同じユダヤ人指導者たちの目を恐れて、見つからないように夜来たのではないかと考えていたりもします。また、ある人たちはこの福音書を通して光と闇が頻繁に対比されていること、そして特に暗闇が、人の罪深さや霊的盲目さを表す意味合いで用いられていることから、救いを必要としていたこの時のニコデモの心の状態を表していたのではないかと考えていたりもします。個人的には、この福音書全体の流れを考えてみても最後の考え方ではないかと思っています。いずれにせよだれにも見られない真っ暗な夜に、心に大きな問題を抱えたニコデモは、イエス様に会おうとひとりで訪ねて来るのです。

●ニコデモの持つ特徴

そして、ここで覚えていてほしいのは、この人物に勝る候補者はいなかったということです。言い換えるのであれば、だれの目から見てもこの人物以上に救いに近いと思われる存在はいなかったということ

です。それは、ニコデモという人物を具体的に見ていけばわかると思います。みことばは、ニコデモに関して少なくとも四つの特徴を教えていました。

１）宗教に熱心な人物

一つ目にニコデモは、宗教に熱心な人物でした。１節のところ見ていただくと、ここで言われていましたけれども、ニコデモはパリサイ人でした。パリサイ人という名前には、そもそも「切り離された者」とか「分かれた者」という意味が含まれています。どうしてそのように呼んだかというと彼らはその名のとおり、まわりの社会や生活から自分たちを切り離して考えていた人たちだったからです。彼らは、神様やその律法を守ることに何よりも強い情熱を抱いていたからこそ、旧約聖書の内容にすべて精通していただけでなく、そこに記されている命令のありとあらゆるものを忠実に守ろうとしていました。彼らは、旧約聖書の内容を知っていただけではありません。彼らはそこに記されている命令のすべてを忠実に守ろうとしていたのです。

そして、実際彼らは神様の命令を守ることにあまりにも熱心だったがゆえに、神様の命令を守るための命令を自分たちで生み出していました。すごくありませんか？神様の掟を守るための掟を自分たちで造っていたのです。たとえばどのようなものがあるかというと、一つ例を挙げるならば、律法には安息日を覚えてそれを聖なる日とすること、その日にはどんな仕事もしてはならないことが求められていました。それをよく知っていた彼らは、安息日に働かないだけではなく、具体的にどのような仕事をすれば、その律法に反するのかをより明白にしようと表などを造り出していたのです。たとえば安息日にひもを結んで結び目を作るのは、彼らにとっては仕事という考えでした。しかし、女性が自分の衣服を結び合わせることは仕事ではないという考えを持っていました。結び目を作るのは仕事ですけれども女性が衣服を結び合わせるのは仕事ではなかったのです。ちょっと想像してみてください。仮に安息日にある人が水を汲みに井戸にやって来ます。そして井戸に下ろす桶にひもを結びつけないといけない場面に直面したとしたらどのようにしたと思いますか？その人は、自分では桶にひもを結びつけることが仕事になるからできないので、それを女性の腰のひもに結んで、そして桶をそこから吊り下していたのです。女性だったら良いのでそのようなことをしていました。それは、良しとされていたのです。不思議だと思いませんか？私たちがこれを聞くとおかしいと思うかもしれませんが、彼らはここまでしても神様に従うことに真剣だったのです。彼らはいろいろな例外を設けようとはせずに、どんなに些細なことであっても主の命令と掟を破りたくないと思い、そして、それを破りそうなものからどうにかして遠ざかろうとしていました。たくさんのルールを設けて、それを守って神様に従おうと熱心に歩んでいたのです。ニコデモは、そんなパリサイ人のひとりでした。

２）道徳的に正しい人物

二つ目にニコデモは、道徳的にも正しい人物でした。これは、一つ目の特徴を考えてみれば容易に想像できるかもしれません。律法をすべて守ることに自分自身のすべてを投じていた彼の歩みは、当然周りの人たちが見てもどこにもとがめる部分がないすばらしいものでした。律法を守ろうとしていたのです。偽りの証言をしてはならないという掟に従って歩んでいた彼のことばは、うそや偽りがないと信頼できるものだったでしょう。盗んではならないという掟に従って歩んでいる彼には、何かを安心していつも託すことができた者だったでしょう。ニコデモは、ほかに並ぶ者がないほど真面目で、誠実な多くの尊敬や称賛を集める存在だったのです。

３）広い影響力を持っていた人物

三つ目にニコデモは、広い影響力を持っていた人物でもありました。１節のところをもう一度見てみると、みことばにこう書いていましたよね。彼はパリサイ人だっただけでなくユダヤ人の指導者でもありました。別のことばで言うのであれば、彼は、ユダヤの最高評議会、司法機関であるサンヘドリンの一員だったと言うことです。この当時、イスラエルには約６０００人ものパリサイ人がいたとされていま

すけれども、その中でもサンヘドリンは、ひとりの大祭司と選ばれた７０名の者たちによって構成されていた機関でした。６０００人のパリサイ人がいる中の選りすぐりの大祭司と７０名のパリサイ人たちによって構成されていたのがサンヘドリンだったのです。そして、そんな特別な彼らには、世界中のありとあらゆるところに住むユダヤ人に対して宗教上の司法権が与えられていて、さまざまな罪を犯した者を裁判にかけることもできましたし、厳しい罰を下すことのできる権威までも持っていたのです。ニコデモは、ただのパリサイ人ではありませんでした。ニコデモは、そんな力を持っていた階級のひとりだったのです。間違いなく彼は、大きな権力と影響力また富すらも持っているような存在だったのです。

４）豊かな知識を持っていた人物（cf.v10「イスラエルの教師」）

四つ目にニコデモは、豊かな知識を持っていた人物でもありました。きょうはもう見ませんけれども、先に進んでいただいて１０節を見ていただくと、イエス様が彼のことをイスラエルの教師と言い表していました。ニコデモは、イスラエルの教師でした。ただ残念ながら、日本語の訳ではあまり読み取ることができませんけれども、この教師ということばの前には、特定のものを指す定冠詞、英語で言う“the”がついていました。つまりニコデモは、単なるひとりの教師だったのではありません。彼は、教師の中の教師でした。彼ほど聖書知識を持っていた者はほかにはいなかったのです。ニコデモは、豊かな知識を持っていました。ある人が聖書の理解に困っている時やほかのパリサイ人の教師たちがいろいろな疑問を覚えた時に、真っ先に頼りにする存在がニコデモだったのです。

改めて考えてみてもすごい人だと思いませんか？ニコデモは、献身的な人物でした。宗教に熱く神様を喜ばせるためであれば、どのような命令にも従順であろうとしていました。道徳的にも非難されるところもなければ、冨や影響力も持っていて人々の間でたたえられ、尊敬されるような人物でした。聖書の知識や理解は、ほかに並ぶ者もなければ、人々の間でいつも頼りとされる人望に厚いすばらしい教師だったのです。もしこのような人物が救われない、神様の前に受け入れられないのだとしたら、それ以外の人たちは、もう言うまでもないと言うことができるまさにこの人物は、非の打ち所のない存在でした。ニコデモ自身も自分が救われていることを疑うこともなかったでしょう。ニコデモは、考え得る限り最高の候補者でした。

そして、それこそがこの話の大切なポイントだったのです。人の外側ではなく内側をすべてご存じのイエス様が、そのような人物が自分のもとにやって来るのを見て、ニコデモにこのように告げられるのです。３節のところでイエス様はこのように言われていました。ヨハネ３：３「**イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」**」と。イエス様が彼に言わんとしたことは明白でした。「ニコデモ、あなたは自分が神の国に含まれていると思い込んでいるでしょう。でもそうではありません。あなたも新しく生まれなければならないのです。」と。

非の打ち所のない人物であったニコデモは、このことばを聞いて、間違いなくひどい衝撃を受けていたでしょう。救いに至ることができると信じて疑わなかったすべてのものが、跡形もなく崩れ去ったのです。確かに、人間的に考えてみれば彼には誇りとする事ができるものはたくさんありました。しかし、そのすべてが何の意味もないと突きつけられたのです。宗教的な熱心さも道徳的な正しさも、永遠のいのちをもたらすことはありませんでした。圧倒的な権力も影響力も豊かな知識も神様の愛をもたらすことはありませんでした。人は、どれだけ自分の態度やふるまいを整えたとしても、たとえどれだけ正しいことに熱心であったとしても、神の子どもとなることは不可能だったのです。

神の国に入るためには、救われるためにはほかの方法はありませんでした。人は、ただ神様にあって新しく生まれなければならなかったのです。それ以外の方法はありませんでした。私たちひとりひとりも同じです。私たちが救われるためには、天に行くためには、神の国に入るそのためには、私たちは新しく生まれ変わらなければならないと。勘違いしてはならないことは、自分自身で成し遂げた何かが私たちに救いをもたらすことは絶対にないということです。私たちがどれだけの年月、教会に忠実に通ってい

たとしても、どれだけみことばや神様のことを知識として知っていたとしても、どれだけ神様のことばに忠実であったとしても、これまでも今もどれだけ犠牲を払って熱心に仕え、どれだけ周りの人の尊敬や称賛に値するようなすばらしい行いをしていたとしても、そのような行為が私たちを神の子どもとすることは絶対にないということです。新しく生まれ変わるそれ以外の方法で私たちが神の国に入ることは絶対にできませんでした。新しく生まれ変わる必要があるのです。

同じ福音書の中で以前も見ましたけれども、少し戻っていただいて、ヨハネ１：１２－１３にこのように記されていました。「**:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。**」と。例外はひとりとしていませんでした。この地上で最もすぐれた候補者、そんなニコデモも同じでした。すべての罪人は、ただ神様の恵みによって新しく生まれ変わる必要があると言うのです。そして、これを聞くと、いったい新しく生まれるとはどういうことなのだろうと思いませんか？すべての者にとって欠かすことができない新生、新しく生まれるとはどのようなものなのだろうと。もちろん、その答えを聖書は教えてくれていました。

２．新生の内容　４－８節

次に、新生の内容について一緒に考えてみましょう。新生についてもう一度よくみことばを見てください。このように４節のところから続いていました。ヨハネ３：４－５「**:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができましょうか。」:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。」**と。

神の国に入るためには、自分の血筋や正しさ、献身的な行いがそこに到達させると信じて疑わなかったニコデモにとって、イエス様のことばを受け入れられない大きな混乱や衝撃をもたらすものであったのは疑いようもありません。４節で彼の混乱を私たちは見て取ることができるのです。しかし、５節でそんな混乱を覚える彼に対して、イエス様はあわれみを示そうとされました。ニコデモに対してもう知らないとするのではなく、**新しく生まれ**るということが何を意味するのかを別のことばを用いてここで説明されていたのです。５節に何と書いていましたか？イエス様はこう言われていましたよね。「……**人は水と御霊によって生まれなければ神の国に入ることができません。」**」と。３節のところと５節では少し違っていました。３節では「**人は新しく生まれなければ**」と言われ、５節では「**人は水と御霊によって生まれなければ**」と言われていたのです。

▸水と御霊によって

ここで鍵となることばがありました。新しく生まれる人は「**水と御霊によって生まれなければ**」ならないとはいったいどういうことでしょうか？どういう意味だと思いますか？この点に関してもさまざまな考えがあります。私たちがこの意味を理解するのに非常に大きな助けとなる箇所がありました。旧約聖書エゼキエル書３６：２４－２７を開いていただくと、ここには罪を犯して、かたくなに民が逆らっている中においても変わらず忍耐を示され、変わらず約束を与えてくださったすばらしい神様の姿が描かれています。「**:24 わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。:25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行わせる。**」と記されています。

さて読み取れたでしょうか？「**水と御霊**」、両方のことばが出てきていました。それらは、それぞれどのような働きをなすと言われたでしょうか？「**水**」は、汚れをきよめる、洗い流すものとして用いられて

いました。そして、覚えていただきたいのは旧約聖書を見ていけば、別の箇所にも同じように、罪や咎をきよめるものの象徴として水が使われている場面を私たちは見て取ることができるのです。詩篇５１：２「**どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。**」と書かれています。また、ゼカリヤ１３：１にこのように書かれています。「**その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。**」と。ポイントは、「**水**」は汚れをきよめるものとして、洗い流すものとして用いられていたということです。

またもう一つ御霊は、人のうちに新しい心を与えるものとして用いられていました。御霊は、堕落して、死んでいるような物の内側を新しく造り変えることができるまた、新しいいのちを吹き込むことのできる力でした。イエス様が「**水と御霊によって生まれなければ**」ならないと言われた時、何を言わんとしていたのでしょうか？簡潔に言えば、人は罪に汚れた内側を洗われ、心が新しく造り変えられなければならないということです。外側ではありません、罪に汚れている内側を洗われて、そして心が新しく造り変えられなければならないのです。いくら外側をきれいに整えても何の意味もありませんでした。神の国に入るためには、人はまず内側が新しいものに変えられていなければならないのです。そして、これはひとえに神様だけがなせるみわざでした。私たちの内側をきよめることも、私たちのうちに新しいいのちを吹き込むことも、私たちにはできません。ただ神様だけにしかできないみわざでした。

改めて考えてみると、キリストを知る前の生まれながらの私たちは、どんな存在だったでしょうか？キリストを知る前、生まれながら私たちは罪に汚染されていた堕落した存在でした。かたくなな心ゆえに、真理からは遠く離れ、光よりも闇を愛していた私たちは、罪に罪を重ねて歩んでいる神様の敵でした。かつてはキリストの十字架を信じることも、すべてを犠牲にして主に従っていくことも、おろかなことに思われ、神の御霊に属することを受け入れようともしませんでした。最初から肉に従って歩んでいた私たちは、専ら自分の肉を喜ばせることだけを考え、神様に感謝をささげることもなければ、心から神様を愛そうともしなかったのです。キリストを知らない時の私たちの考えや思い、意志やふるまいもそのすべてが罪によって汚れていました。私たちは、肉に従って歩んでいたからこそ神様を喜ばせることはいっさいできない者でした。

ローマ８：８に「**肉にある者は神を喜ばせることができません。**」と書かれていました。キリストを知る前に、私たちがなした人間的に見てすばらしいどんな行いも、肉のうちになされていたすべてのものは、神様を喜ばせることは何一つありませんでした。むしろ神様の前には何一つが価値のないものでした。私たちはかつて堕落していた者でした。しかし、私たちはただ罪によって汚染された堕落した存在だっただけでもありません。私たちは、罪と罪過の中に死んでいた者でもありました。私たちは、みな死んでいました。霊的な病気を抱えて、ほぼ死にかけの瀕死の状態だったのではありません。すでに骨まで干からびているような存在だったのです。私たちの内にいのちはありませんでした。私たちは、干からびていたのです。

聖書は、そのような死んでいる者の様子をわかりやすく描いていました。先ほど、私たちが読んだエゼキエル書３６章の次の３７章を見てみると、１－５節のところにこのように書かれていました。「**:1【主】の御手が私の上にあり、【主】の霊によって、私は連れ出され、谷間の真ん中に置かれた。そこには骨が満ちていた。:2 主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。:3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたがご存じです。」 :4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。【主】のことばを聞け。:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。**」と。これが、かつての霊的状態でした。キリストを知る以前の私たちはみな罪によって汚れ、罪によって堕落し、霊的に死んでいた存在だったのです。ひとりとして例外はいませんでした。たとえどんなに人の前にすばらしい歩みをしていたニコデモであってさえ死んでいたというの

です。そして、死んでいた私たちには神様を喜ばせることも、救いに関することも文字どおり何もできませんでした。だからこそすべての者に奇跡が必要でした。ほかのだれでもない力強い神様が、私たちのうちに働いて、汚れをきよめてくださり、いのちを吹き込んでくださる奇跡が必要だったのです。

新しく生まれるために私たち自身ができたことは何もありませんでした。すべてが神様の恵みのみわざでした。測り知れない神様の力によって、死んでいた私たちは新しく生きる者として変えられたのです。テトス３：５に、このように書かれています。「**神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**」と。すごいことを神様がなしてくださいました。果たして、私たちは新しく生まれた者として今を生きているでしょうか？私たちが何かをしたのではありません。私たちのうちに神様はもう働かれたでしょうか？御霊によって新しいいのちが与えられた者として新しい歩みをしているでしょうか？それとも外側だけはあたかも新しく造り変えられたようにふるまいながら、変わらずに肉に従い罪の奴隷として歩んでいるのでしょうか？

注目してほしいことばがあります。ヨハネの福音書３章に戻っていただいて、さっきの続きを見てください。ヨハネ３：６でイエス様は、「**肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。**」と言われています。これは、何を言わんとされたのでしょうか？言われていたことは明白でした。「**肉によって生まれた者**」は、持って生まれた性質のとおりに肉に従って歩み、「**御霊によって生まれた者**」は、持って生まれた性質のとおりに御霊に従って歩もうとするということです。よくわからないという方は、イエス様が別の箇所でこれと似たようなことを教えていたことを覚えているでしょうか？そちらの方がわかりやすいかもしれません。イエス様は、ルカ６：４３－４４節でこのように言われていたのです。「**:43 悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。6:44 木はどれでも、その実によってわかるものです。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。**」と記されています。当たり前に聞こえるかもしれませんけれども、りんごの木からみかんは採れませんし、ぶどうの木からいちごは採れません。どうしてですか？それは、その木になる実は、もとの木の種類が何かによって決まるからです。植えた木が何かによって、できる実は決まっているのです。植えた木と別のものが実ってくるのなら、それは大きな問題でした。なぜならそんなことは起こらないからです。そして、これと同じように「**肉によって生まれた者**」からは肉の行いが出てくるし、「**御霊によって生まれ**」ている者からは御霊の行いが出てくるのです。

よく考えてみてください。ある人は、表面上はうまく取り繕っているように思うかもしれません。礼拝には熱心に出席し、神様についてはいろいろな知識を持っていて、聖書の教えに忠実に従っていて、周りの人から尊敬されるような歩みをしているかもしれません。たくさんの奉仕をしてすばらしいことなしているかもしれません。しかし、もし新しく生まれていないとしたら、もし御霊によって新しくされていないとしたら、結局のところその人からは、罪を愛し自分の肉に身を任せて生きていたかつての自分が出てくるのです。「**肉によって生まれた者は肉**」です。「**御霊によって生まれた者は霊**」です。

自分自身のこととしてよく考えてみてください。果たして、私や皆さんひとりひとりは、もうすでに御霊に心が取り替えられて新しくされた者でしょうか？それとも表面だけを取り繕っている者でしょうか？もちろん勘違いしてほしくないのは救われた後も私たちは罪との戦いを経験します。罪との葛藤を私たちは、日々味わったりもしますし、罪の誘惑に負けて神様を悲しませることもあります。私たちのうちから罪が全くなくなるという話をしているのではありません。私たちは罪と葛藤しながらこの地上での生活を最後まで歩むのです。問われるのはもし罪を見たとすれば、喜んで今すぐにでもその罪を悔い改めて、義やきよさを追い求めながら神様を何よりも喜ばせる者として変わり続けていきたいと願っているかどうかです。新しく生まれる前は罪を愛して生きていました。新しくされた者は罪を忌み嫌い、神

様を愛する者として変えられました。神様を愛しているから私たちは罪と葛藤するのです。罪を愛している者は葛藤にはなりません。ただ罪の言われたままにさせているだけに過ぎないのです。

果たして、義やきよさを追い求めたいという願いがうちにあるでしょうか？みことばによく耳を傾けてください。Ｉヨハネ３：９「**だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。**」と。もう少しきちんと言うのであれば「罪を犯し続けません」。「**なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことが**（罪を犯し続けることが）**できないのです。**」と記されていました。新しく生まれた者は罪を犯し続けることはできませんと。またそれだけではありません。先ほども言いましたが、かつては自分自身を愛していました。しかし新しく造り変えられた者は、神様を心から愛する者として生まれ変わったのです。どうでしょう？私たちは日々神様のことを知って、神様を信頼し、神様に従う者として歩み続けていきたいと願って生きているでしょうか？神様のことを知りたいと願うからこそ、みことばを学び、神様を愛しているからこそみことばに書かれている掟に従っていこうとしているでしょうか？

そして、それと同時に、同じ神様によって生まれた兄弟姉妹のことも進んで愛する者として歩んでいるでしょうか？私のことばではありません。みことばに耳を傾けてみてください。Ｉヨハネ５：１に「**イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。**」と書かれています。新しくされた者の中に、神様だけを愛して兄弟姉妹を愛せないという人はいないということです。そして、もし兄弟姉妹に対する愛がいつまでも自分のうちに出て来ないのであれば、自分自身の信仰をよく考えてみる必要があります。新しく造り変えられた者のうちには必ず兄弟姉妹を愛する思いがあるのだとみことばは教えていました。どうでしょうか？私たち自身はすでに新しく造り変えられた者でしょうか？

そして最後に、もう一度テキストに戻っていただいて、イエス様はこのことばをニコデモだけではなくて、このことばを耳にするすべての者に投げかけておられました。７－８節のところにこのように書かれています。「**:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。:8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。**」と。ご存じのとおりイエス様はご自身最高の教師でした。だからこそここで今の私たちにも容易に思い浮かべることができる風をたとえに出して、そしてこれまで教えてきた内容に説明を加えていたのです。すこし考えてみてください。風と聞くとどのようなものを連想するでしょうか？いろいろな考えが出てくるかもしれません。しかし少なくとも風は、私たちの目に見えないものであると同時に、その力は人の手には負えないものでした。実際に、私たちは風の姿を目にすることはありません。しかし、風が吹けばその存在を音などによって知ることができます。突風が吹けば、そこにあるいろいろなものが宙を舞ったりするのです。そして、それを通して私たちは風が吹いたのだと知ることができます。確かに風は目には見えません。しかし、その存在がもたらす力や効果を私たちはさまざまな形で見て取ることができるのです。

そして、ここでイエス様が言わんとされていることと同じでした。それが御霊の働きと同じだと言うのです。神様が私たちを新しく生まれさせ、古い心を造り変える働きも、実際にその瞬間を目で見ることはないでしょう。それがいつどのようになされるのかも私たちにはわかりません。それでも皆さん、その働きを神様がなされたのだとすれば心は必ず変えられ、そしてその力や効果はその人物のうちに必ず見て取れるようになるのです。風が通っていけばそこに風が通ったのだとわかるように、神様が御霊を働かせて、その人の心に働かれたとすれば、そのことが私たちの目に明らかになると言うのです。

救いのみわざは、私たちの手に負えるものではありません。死んでいた私たちのうちに神様が働いてくださって、そして新しく造り変えてくださったのなら、新しいいのちを与えてくださったとしたら、それは奇跡そのものでした。それは恵みのみわざにしか過ぎないのです。人には決してできないことを主

が成し遂げてくださいました。そうだとすれば、私たちひとりひとりにできる応答は何でしょうか？私たちひとりひとりにできる応答は、もし自分自身のこれまでの歩みが、口では信じたと言っていながら、神様の前に逆らって自分勝手なものや肉に従って生きていたのならば、その罪に気づかされたのであれば、気づかせてくださった神様に感謝して、そしてこの方のあわれみを求めてください。そこに気づかせてくださったことを喜んで、神様だけができる心を変えるというみわざをどうか自分にもなしてくださいとあわれみを求めてください。その罪に気づかされたのであればその罪を心から認めて、それを悔い改めて、自分の罪のための身代わりとして十字架にかかり死んでくださったイエス・キリストを自分の救い主として、主として信じ生きてください。これまでがどうであるかではありません。表面上のものも、イエス様の前にはどうということもありません。見られているのは私たちの内側です。私たちを新しく生まれさせてくださるのは神様だけです。

　そしてその神様の働きを知ったのであれば、私たちはいつも感謝することができます。私たちにはなせないことを神様がなしてくださったこと、神様が私たちに働いてくださっていることをいつも喜ぶことができます。そして喜びながら新しくされた者として生きていこうとするのです。神様にはどんなにかたくなな、罪深い心でさえ変えることができる力がありました。風が人の力をものともせず、すべてのものを吹き飛ばすことができるように、御霊の力は、どんなにかたくなな者の心でも打ち壊すことができるのです。私たちはその神様の働きを祈り、信頼することができます。そのような神様と私たちはともに歩むことができます。それならば新しく造り変えられた者として、この方の栄光を現わす者としてともに歩んでいきましょう。